

煩悶と白い紫陽花

拙い。此の儘じゃ、絶対に拙い。

最近、毎日のように太宰と逢っている。

こんな事をしていたら、俺、本当に

此奴と離れられなくなるんじゃない？

ここ数日、その事でずっと頭を悩ませていた俺は、太宰と少し距離を置こうと意を決した。

「なあ、太宰、俺たち……」

「ねえ、中也！！ 旅行、行かない！！」

朝食の後片付けを終えた俺が、ソファで珈琲を飲んで寛いでいる太宰の側に戻り乍ら言いかけた言葉を、太宰のそんな言葉が容赦なく遮った。『少し、距離を置かねえか？』と続けて云う心算だったのに……。

「……は？」

太宰は、珍しく何か雑誌を読んでいて、其れを見乍ら目をキラキラと輝かせていた。

「ねえねえ、一泊二日でもいいから、休み取れない？」

「……んだよ、急に……」

人の気も知らねえで……。

「だってえ……、横浜に居たらデートも出来ないじゃないか……。偶には何も気にせず、一緒に出かけたいつて、君は思わないのかい？」

そんな事……思わない日の方が無えよ。

「今、休みなんて取れねえよ」

煩悶と白い紫陽花 番外編 一

遊覧船が停泊している湖の船着場。その付近に止まっている消

防車、軍警の車両、そして、大勢の人ばかり……。その中へ足を
進める太宰と中也。

太宰が人だかりの中にいる地元の人間らしい年配の女性に話を
聞いていると……。

「あれ？ 太宰？」

その声に太宰が振り返ると、そこには同じ武装探偵社の江戸川
乱歩が居た。咄嗟に人ごみに身を潜める中也に気づかない振りを
して乱歩を見る。

「えつ、乱歩さん!? 如何してここに……?」

「名探偵の仕事に決まってるだろ? お前こそ、なんでこんな
処に? ……ああ、そうか、素敵帽子君と一緒に。狡いなあ、

僕も観光したい!」

「乱歩さん、今いらしたばかりですか?」

「うん、そうだよ」

「じゃあ、まだ事件の事は?」

「大体は聞いたけど……、そうだ、太宰、お前が手を貸してくれ
たら、大分助かるんだけどな……」

「私で宜しければ。そのかわり、一寸聞いて欲しい事があるので
すが」

「ああ、僕も只でとは云わないよ。……あつ、呼ばれてる。じゃ、

太宰、後で電話するから、ちゃんと出ろよ!」

「はい、はい。解りました」

「はいは一回だ!」

「はい……」

軍警のいる場所へと向かう江戸川乱歩を見送った太宰は、中也
の居る方へ戻る。

「ごめん、中也」